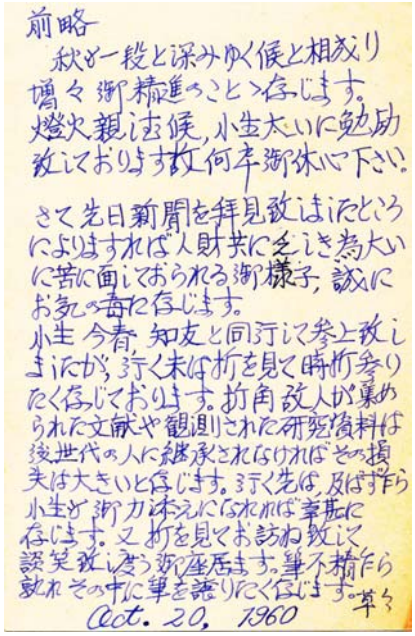
山本一清博士と東亜天文学会（2）

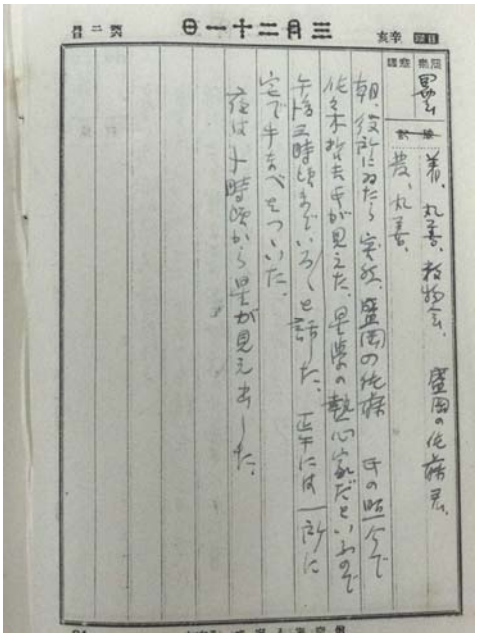
東亜天文学会　武田榮夫

はじめに

昨年に次いで京大構内の「益川記念館」の山本天文台資料室で資料調査を続けているが、その中で 1 枚の葉書が見つかった。1960 年に山本英子夫人へ宛てた自筆の葉書である。山本一清博士が他界された翌年、ある新聞記事を見て英子夫人に一通の書状を差し上げた。山本天文台が主を失い、財政的にも存続が困難になってきているとの報道であった。葉書の中で、故人の遺された貴重な資料は将来に生かされてこそ意義があり、いつの日にか調査したいと表明したのであった。20 歳の秋のことであった。時は流れてそれから半世紀後、2011 年から志願ボランティアとして今回の資料調査に参加するに至った。主として、博士と東亜天文学会の関連を調査し、その成果の一部を東亜天文学会誌「天界」に連載している。奇縁に近いものを感じる昨今である。


前略
秋も一段と深みゆく候と相成り
増々御精進のことと存じます。
燈火親しき候，小生大いに勉励
致しております故何卒御休心下さい。
さて先日新聞を拝見致しましたところによりますれば人財共に乏しき為大いに苦に面しておられる御様子，誠にお気の毒に存じます。
小生今春，知友と同行して参上致しましたが，行く末は折を見て時折参りたく存じております。拙角故人が集められた文献や観測された研究資料は後世代の人に継承されなければその損失は大きいと存じます。行く先は，及ばずながら小生が御力添えになれば幸甚に存じます。又折を見てお訪ね致して談笑致したく新座居ます。筆不精乍ら就れその中に筆を続りたく存じます。草々
Oct. 20, 1960

筆者が山本英子夫人に送った葉書（1960 年）


三月二十一日
朝，役所に行ったら突然，盛岡の佐藤君，
佐々木哲夫氏が見えた。星学の熱心家だと，
午後三時頃まで，いろいろと話した。正午には一緒に
宿で午食をついた。
夜は十時頃から星が見えそーした。

佐々木哲夫との出会いを記す先生の日記

京大天文学派についての一評価

草創期の京都大学における天文学について、次のような考察がある。

「東京側では相変わらず編暦・報時中心の『お役所天文学』が幅を利かし、古典的天文学の正統を守っていたが、天体物理学を志向する世代が昭和になると、あらわれてきて、発展の曙光が見えてきた。京都帝大では物理学出身の新城新蔵（1873-1938）が天文学で最近開拓された振興の天体物理学に主力を注ぐべしとして、天文学の名を故意に避けて、明治

四十二年物理学第四講座から移って宇宙物理学講座を発足させ、のち大正十年宇宙物理学科を出発させた。東京天文台を持つ東大とは観測設備や予算の上で問題にならなかったが、東大の正統に抗してアマチュアの組織に尽力した山本一清（1889-1959）のような毛色の変わった天文学者を出した。」（中山　茂著「日本の天文学」、岩波書店、1972）

前半の部分は京都帝国大学における天文学の黎明期の動向を示すものであり、後者の部で山本一清博士をクローズアップさせているところが興味深い。その見方はともかく、科学史の大家から見ても山本博士の存在は異彩を放っていると映ったに違いはない。

「同好会」までの前史

明治や大正の時代に既に天文に関する同好会はあったようである。「例えば、井上四郎が横浜の自宅で 1903Ⅳ彗星を発見したときも数名の同好者が集まっていた。（中略）また、著名な神学者、内村鑑三は星之友会という同好会を作り、井上四郎などを講師としてしばしば研究会を開いたという」。井上四郎はアマチュア天文家から 1918 年に東京天文台に入り、1932 年まで在籍した。1908 年発足の日本天文学会の発起人の一人に名を連ねていた。（日本アマチュア天文史編纂会編「日本アマチュア天文史」、恒星社、1987）。

1920（大正 9）年の「天文同好会」結成以前の山本博士の動向に関して、東亜天文学会の会長を永年務めた長谷川一郎氏によれば、重力測定で全国を調査していた博士は、各地の同好会の協力を得て、天体観望会や講演会をしていたようだと推測している（「日本の天文学の百年」、恒星社厚生閣、2008）。しかしながら、書き残された日記を 1913（大正 2）年まで遡って丹念に調査したが、それに該当する記述は全く見出すことはできなかった。「同好会」の発足後はともかく、発足以前にアマチュア天文家と何らかのパイプで繋がっていたことを示す資料は、今のところ、見出せない。

佐々木哲夫氏との出会い

山本博士は水沢の臨時緯度観測所に勤務中の 1915（大正 4）年に 2 回に亘って、岩手県気仙郡の佐々木哲夫氏の訪問を受けていた。3 月 21 日の日記に「朝、役所にゐたら、突然盛岡の佐藤氏の紹介で佐々木哲夫氏が見えた。星学の熱心家だといふので午後三時頃までいろ〜話した。正午には一所に宅で牛なべをつ〜いた」と記されている。初対面の青年を自宅に呼んで当時は口にすることの少なかった「すき焼き」鍋を囲んだとは、よほど意気投合されたことと思われる。同年 12 月 2 日には「帰れば、気仙郡より佐々木哲夫氏来訪、待ち居られる。因って、天文上の話しをなす」とある。この年の佐々木氏との出会いは運命的なものであったが、これで話は終わらない。

「夕方、メトカーフ 1919 c 彗星を撮影す。夜は遊星案内を脱稿す。今夜、佐々木君は山羊座に彗星状の一天体を見たといふ」。1919（大正 8）年 10 月 25 日の山本日記の一部には、このように記されている。続いて、「夕方、メトカーフを撮影して、のち帰宅。しかるに十時頃、佐々木君突然として来訪。昨夜以来の星雲状が動いたという」（10 月 26 日）。「佐々

木君と百済君と三人で談合。昨夜の佐々木君観望談をきき、彗星たる事、略々明らかになったので、東京天文台へ電報した」（10 月 27 日）。このように、水沢で山本博士に出会って 4 年後に佐々木氏は京都帝国大学天文台で彗星を発見したのである。フィンレー彗星の再現を確認したもので「フィンレー・佐々木彗星」と呼ばれることとなった。

「彗星の如く現れ、……」

京都大学における天文学の黎明期の記録の一つとして、山本博士との関連で佐々木氏のことをもう少し書き残しておきたい。佐々木氏には、この先に思いがけない運命が待ち受けていた。病のため 1921（大正 10）年 2 月に夭折したのである。突然の死を知らせる電報に接した山本博士は嘆き悲しみ、「天界」第 9 号を「故 佐々木哲夫君記念号」として発行した。同誌を全面的に故人の追悼特集号として組むのは、その後を見てもごく稀である。この記念号の中で山本博士は「噫 佐々木哲夫君」と題する長文を綴っている。

それによれば、同氏は盛岡師範学校を卒業して小学校に奉職したが、教壇上の活動はあまり気が向かないらしく、もっと自由に勉強したいと、京都に戻った山本博士への手紙に綴った。「大正八年春、いよ～教職を辞して、京都大学天文台に入らるゝようになったのは、確かに同君のためにも、また京都天文台のためにも喜ばしい一新時機であった」「同君は暇があれば、乞うて諸教授の講義を傍聴し、堂々たる大学生達と席を同じくして、自らの才を磨いた」そして、最後に「短かった彼の一生、殊に其の中でも天文家としての得意時代は二年に満たない。しかし此の短い月日の間に、彼は一躍にして世界に其の名を挙げ、また忽ちにして世を去ったことは、彼が発見した彗星其のものを擬人化したかのように、華やかにしてまた憐れであった。あゝ彗星発見者自身が一個の彗星的奇才であったのか。自分には佐々木君のことは涙なしに書けぬ」と結んだ（いずれも現代仮名遣いに書き改め）。

緯度観測所長の木村榮博士も同誌に追悼文を寄せ、次のように綴っている。「其内新城教授及山本助教授の好意により、京都大学に雇るゝ事となり、其の決定的通知を受けたる時は、天にも昇りたる愉快を感じ居られた。是れ、同君の学術研究大家の側に行かるゝ事の、如何に楽しく又自分の多年の希望を達し得たるが為なるべし。大学に入りて以来の消息の詳細は私の知らざる處なるも、短日月の間に幸い佐々木彗星の名をなさしめたるは、偏に神の同君の熱心を憐み賜いし為なるべし」（現代仮名遣いに書き改め）。この最後の言葉に辛うじて慰めを見出すことができる。

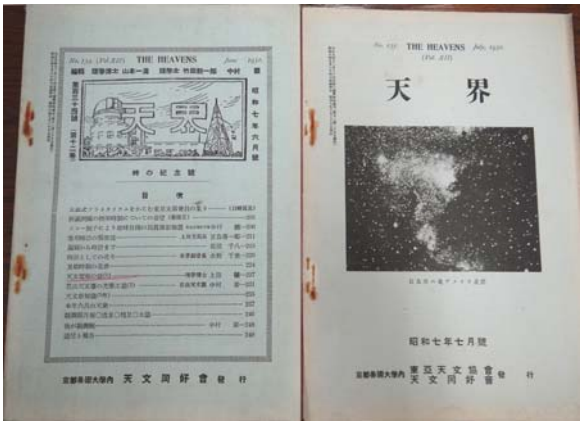
ここに山本博士の大きな影響力を感ずる。臨時緯度観測所に勤務中、アマチュアとして訪ねてきた星好きのひとりの青年を後年母校の天文台へ迎え入れ、プロフェッショナルの道へと育てる。木村博士の文中にあるように、新城教授と山本助教授の深い理解があったからこそで、当時の大学の懐の深さにおおらかな時代背景を感ずる。その佐々木氏は「天文同好会」の結成の呼び掛け人にも名を連ねていた。「天界」創刊号の「天文同好会創立の趣意」の末尾にある発起人の山本一清、古川龍城、「外　数名」のひとりであったのである。なお、アマチュアから京大天文台へ任用された例に佐々木氏より以前に旧制の同志社中学

卒業後に志願助手として入室した中村要氏があるが、同氏については、「中村要と反射望遠鏡」（冨田良雄、久保田淳著、ウインかもがわ、2000）に詳細にわたって記述されている。

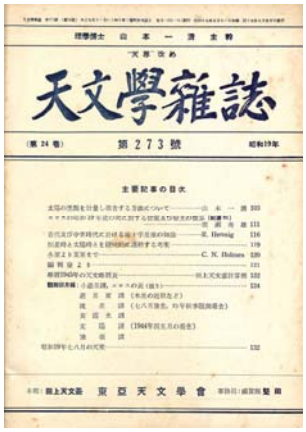
「天文同好会」と「天界」の変遷

その後、「天文同好会」は順調に発展し、1932（昭和 7）年の時点で北は札幌から南は鹿児島まで 30 都市に、大陸には奉天、大連、上海、朝鮮（京城）、台湾（台北）の 5 都市に、さらには遠く太平洋の彼方、北米（カリフォルニア）と南米（ブラジル）にも支部が設けられた。延べ 37 支部を抱え、「天文同好会」は大いなる発展を遂げた。このあと、この翌 1933（昭和８）年に「東亜天文協会」と改名した。「東亜」の名が冠せられたのは、当時の社会情勢を敏感に反映していると思われる。さらに、10 年後の 1943（昭和 18）年には「東亜天文学会」と改称した。ことはこれだけでは収まらなかった。会誌「天界」は翌 1944（昭和 19）年に「天文学雑誌」と名を改めた。敗色濃い中での「学会」への「改称は戦時中の物資統制下で『天界』の用紙配当を受けるために必要であったという」（「日本の天文学の百年」、恒星社、2008、第１部、「第３章　京都における天文学の草創と伝統」、小暮智一）。

会誌が「天界」の名で復刊されたのは終戦から３年後のことであった。このように、小さな学会の歴史も時代の大きな「うねり」に翻弄されざるを得なかったのである。



「天文同好会」と「東亜天文協会」連名の天界（1932 年）



天文学雑誌（1944 年）

結び

今後は山本博士がアマチュア天文家と交わした手紙や関係資料等を調査し、博士がアマチュア天文家の育成に大きな力を注がれた背景をさらに探っていきたい。